

学生による授業評価アンケート結果について（総評）

2009年度に新方式による本格的な授業評価アンケートを実施し、その結果を冊子として纏めるとともに、ポータルサイトでの閲覧が可能な状態で公表しました。その時は本格実施ということもあり、すべての教員の全科目を対象としたため冊子は大部なものとなりました。2010年度のアンケート実施にあたっては、全教員を対象とするものの、各教員の担当する科目の中で受講者数の一番多いクラス1科目としました。

本年度は、以前から後期に実施してほしいという要望もありましたので、必修・選択必修科目優先で各担当者1科目でアンケートを12月に実施しました。（質問項目も若干見直しました。）アンケート結果で5名以上の回答のあったものについては従来通り担当者にお返しするとともに、結果に対するコメントをお願いしました。ご協力ありがとうございました。

平行してFD委員会において結果の分析・検討をおこないました。結果分析に際しては、昨年同様に「グループ平均」を用いて、今年度の評価結果の特徴を見るとともに、昨年度の結果との比較の視点を取り入れました。同一科目ではないので、厳密に言えば正確な比較とは言えませんが、特徴的な傾向は読み取れるのではないのかと思われます。その結果は次ページ以降の学部・部門別の分析をご覧いただきたいと思います。数字上では大きな変化はありませんが、教員と学生の意識の差が読み取れ、どの点において改善が必要であるかが見えてきた気がします。先生方がアンケート結果を真摯に受け止め、改善の工夫のための議論の材料としていただければ幸いです。

なお、今年度は授業公開（見学）も拡大して実施しました。研修会は3回実施しました。授業評価、授業公開、FD研修会などの地道な研鑽の積み重ねが本学の教育の評価を高めていくことになると思われます。諸先生のご理解・ご協力に感謝するとともに、今後もいっそうのご協力をお願いいたします。

2012年3月1日

相愛大学FD委員会 委員長 山下 昇
中村圭爾
川中美津子
江草浩幸
米田哲二
中村富予
藤永慎一
左官雅則
小川智成

授業評価アンケート調査結果 グループ平均一覧

	基礎・共通	音楽学科	音楽マネジメント学科	日本文化学科	仙教文化学科	文化交流学科	英米文化学科	人間心理学科	社会デザイン学科	子ども／栄養	子ども発達学科	発達栄養学科	資格関係	留学生
問1	3.22	3.24	3.40	3.21	3.56	3.13	3.32	3.21	3.13	3.33	3.11	3.44	3.16	3.78
問2	3.21	3.43	3.26	3.42	3.35	3.69	3.89	3.22	3.09	3.52	3.11	3.31	3.24	3.84
問3	2.69	2.87	2.30	3.22	3.00	3.50	3.63	2.93	2.70	2.90	2.33	2.45	2.61	3.73
問4	3.20	3.51	3.24	3.45	3.14	3.67	3.89	3.36	3.18	3.57	3.17	3.17	3.34	3.86
問5	3.60	3.81	3.42	3.76	3.64	3.92	4.00	3.75	3.64	3.86	3.53	3.53	3.71	3.97
問6	3.39	3.57	3.26	3.64	3.27	3.93	3.95	3.61	3.40	3.76	3.29	3.17	3.48	3.97
問7	3.62	3.79	3.37	3.78	3.60	3.93	3.95	3.70	3.58	3.71	3.51	3.65	3.55	4.00
問8	3.35	3.61	3.40	3.56	2.73	3.87	4.00	3.35	3.21	3.71	3.21	3.35	3.57	3.97
問9	3.36	3.51	3.40	3.55	3.00	3.93	3.89	3.42	3.34	3.86	3.27	3.36	3.44	3.94
問10	3.31	3.51	2.93	3.58	3.18	3.73	3.89	3.40	3.28	3.48	3.03	3.15	3.26	3.95
問11	3.25	3.58	3.30	3.55	3.00	3.93	3.89	3.59	3.35	3.86	3.26	3.19	3.38	3.68
問12	3.24	3.48	3.14	3.54	3.00	3.93	3.89	3.47	3.19	3.81	3.23	3.09	3.36	3.95
問13	3.29	3.48	3.27	3.52	3.44	3.85	3.84	3.35	3.25	3.62	3.14	3.27	3.34	4.00
問14	3.31	3.55	3.28	3.61	3.24	3.94	3.89	3.51	3.27	3.95	3.26	3.17	3.35	3.81
平均値	3.29	3.50	3.21	3.53	3.22	3.78	3.85	3.42	3.26	3.64	3.18	3.24	3.34	3.89

授業評価アンケート調査結果 グループ平均一覧(レッスン)

	音楽学科	声楽専攻	ピアノ専攻	創作演奏専攻	オルガン専攻	管弦打楽器専攻	古楽器専攻	作曲専攻
問1	3.22	3.41	3.81	3.53	4.00	3.90	3.57	4.00
問2	3.65	3.86	3.94	3.87	3.50	3.96	3.29	4.00
問3	3.48	3.82	3.96	3.60	3.50	3.90	3.29	4.00
問4	2.98	3.27	3.52	3.20	3.50	3.54	2.57	4.00
問5	3.79	3.86	3.94	3.93	3.50	3.98	3.57	4.00
問6	3.79	3.91	3.96	3.87	4.00	3.97	3.43	4.00
問7	3.62	3.82	3.94	3.80	4.00	3.98	3.57	4.00
問8	3.61	3.86	3.92	3.80	3.50	3.91	3.57	4.00
問9	3.84	3.91	3.98	4.00	4.00	3.98	3.86	4.00
問10	3.87	3.95	3.96	4.00	4.00	4.00	4.00	4.00
問11	3.88	3.91	3.90	4.00	4.00	3.90	4.00	4.00
問12	3.86	3.86	3.96	4.00	4.00	3.84	4.00	4.00
平均値	3.63	3.79	3.90	3.80	3.79	3.91	3.56	4.00

授業評価アンケート結果の分析（基礎・共通および資格関係）

1. 評価の特徴

前年度との比較

今年度、音楽学部および人文学部が改組されて3つの新しい学科が発足し、基礎・共通科目のカリキュラムも大幅に変更された。また、アンケートの質問項目も一部が改変された。したがって、昨年度や一昨年度との単純な比較は難しいが、試みてみたい。

【基礎共通科目】 質問2、3、4（授業への熱意、シラバスをきちんと読んだか、授業目的の理解）の得点が相変わらず低い（3.21、2.69、3.20）。特に、質問3については項目中最も得点が低いままであり、値もほとんど変わっていない。今年度からキャップ制が導入されたため、科目選択の際に学生が授業内容に以前より注意を払うようになる可能性もあったが、そうはならなかったようである。もはや、学生が自主的にシラバスを読む、あるいは十分理解することは期待できず、授業中にガイダンスをしっかりと行うしか手がないのかもしれない。

一方、質問5、6、7（教員の熱意、話し方のわかりやすさ、授業時間の守り方）の得点はこれまで同様高い（3.60、3.39、3.62）。今年度、カリキュラムが変更され、担当者も大勢替わったが、教員の授業態度は変わりなく認められていると言える。値そのものに変化はないが、これは得点が天井に達しており、これ以上の上昇は困難であることを示しているようにも思われる。ただし、質問6（話し方のわかりやすさ）に関しては、比較的得点が低く、教員個人の努力でまだ改善の余地がある。

今回、質問1、8、9の内容が大きく変わった。質問1は、出席の頻度（毎回、ほとんど、半分程度、たまに）を尋ねる形式から、「休まず授業に出席している」が自分にどれくらい当てはまるかを尋ねる形式になった。評価は、値自体が下がった（3.42、3.34 から3.22へ）だけでなく、質問項目間での相対的な高さも下がった。この傾向は資格関係科目や他の科目群にも共通してみられる。一見すると学生の授業態度傾向に変化が生じたようにも思えるが、質問のしかたが変わったこと、一昨年度、昨年度は前期にアンケートが実施されたが今年度は後期であったことの影響も考えられる。「休まず」という表現が値を引き下げる方向に働いたのかもしれないし、後期になると出席率が下がることは周知の事実だからである。質問8は、「担当教員は授業に参加しやすい環境をつくっている」から「担当教員は学生主体の授業をしようとしている」に変更されたが、得点が3.4以上から3.35へとやや下がった。値の変化が小さいので確かなことは言えないが、質問の明確化により、学生主導型あるいは学生参加型授業の少なさが示されたと解釈することもできる。さらに、質問9は、これまでの質問9「板書は分かりやすい」と質問10「プリントや視聴覚教材が効果的に用いられている」をまとめた、「板書、プリントやパワーポイント、視聴覚教材が効果的に用いられている」という形になった。以前の質問9の得点は項目間でも特に低く（3.16、3.16）、質問10では逆に高かった（3.36、3.38）。今年度の質問9の得点は3.36で、これまでの質問10に近くなった。この傾向もほとんどの科目群に共通している。最近パワーポイントや視聴覚教材を用いる授業が多く、また学生にはそれらの印象が強いため、板書の評価が覆い隠されてしまったのかもしれない。

質問11、12、13、14（授業内容の興味深さ、理解しやすさ、評価基準の明瞭さ、授業への満足度）の得点は項目中の中位（3.28程度）に位置し、値は多少変動しているが、

傾向は以前と変わっていない。このうち、質問11、12、14の事柄の場合、個々の教員の努力に任せては、これ以上の改善は困難かもしれない。教員の反発を買うおそれが多分にあるが、関係する教員集団による、学生の学力などを考慮した授業内容や教授法の検討、それらに関する研修の反復など、思い切った全学的取り組みが必要であろう。一方、質問13に関しては個人でも比較的改善が容易と考えられ、得点の上昇が期待される。質問10（シラバスに従った授業進行）も同様に改善しやすい項目と言えるが、一昨年度、昨年度（3.22、3.24）より得点が上がっている（3.31）。

【資格関係科目】一昨年度はこの区分がなかったため、一昨年度との比較のみになる。今年度の質問項目間での値の高低傾向は基礎・共通科目とほとんど変わらない。ただし、全体に基礎・共通科目より評価値が高い。一昨年度からの変化で基礎・共通科目と明らかに異なるのは、評価値の全体的な上昇（平均得点は3.20から3.34）である。特に、質問6（3.07から3.48）と質問12（3.05から3.36）の伸びが著しい。

他部門との比較

先にも述べたように3学科が新設されたが、いずれも入学者数は少なかった（20名以下）。また、募集を停止した既存学科でも学生数が著しく減少している。当然、それらの学科の専門科目の受講者数は相対的に少ない。一方、基礎・共通科目は全学の学生が受講するので相対的に受講生が多い。そのため、科目群間の比較は難しくなっており、多くを語ることはできない。

基礎・共通科目の場合、全質問の平均得点は、一昨年、昨年とほとんど同じ値で、科目群の中位にあることもこれまでと変わらない。資格関係科目の値は一昨年に比べて大きく上がったが、科目群間では下位から中位に上がっただけである。

2. 科目の区分や受講者数と評価との関連性

ここでは、新カリキュラムの科目のみを取り上げる。しかし、今年度はカリキュラムの過渡期に当たるため、完全な新設科目で1回生のみが履修する科目と旧カリキュラムを兼ねて2回生以上も履修する科目とが混在しており、確かな分析はできない。また、正式の科目群によってはサンプル数が少ないため、複数の科目群をまとめた新たなグループ間で比較を行った。なお、資格関係科目はサンプル数が少なすぎるため除いた。

受講者数と授業の興味深さ、理解しやすさ、満足度との相関係数はいずれもマイナスの値であった（最大は満足度の場合の-0.22）。値だけ見ると受講者数が少ないほど評価が高いようであるが、統計的に有意な傾向ではない。

科目を基礎科目（建学の精神、大学生のための日本語入門）、一般講義科目（美学、地理学、政治学、教育原論、化学、地球と宇宙）、実技系科目（情報処理演習、健康とスポーツ実習）、英語（日本人講師）、英語（外国人講師）、その他の外国語（ドイツ語、イタリア語、フランス語、中国語）の6群に分けて、得点の差を検討した。興味深さ、理解しやすさ、満足度のいずれにおいても、実技系科目か英語（外国人講師）が最高点で、基礎科目が最低点であった。実技系科目の評価の高さと必修科目（建学の精神は必修であり、日本語入門は選択必修ではあるが、2科目のどちらかを選ばねばならないので必修に近い）の評価の低さは以前から知られているところである。英語（外国人講師）の評価の高さは、科目が英会話であることから容易に理解できよう。ただし、統計的に有意であるのは理解しやすさと満足度に関する差だけである。

なお、受講者数が少ないと、1 受講生の極端な評価が平均値をその方向に引きずる可能性がある。その確かな証拠（受講者数の少ない科目ほど年度による評価の変動が大きい、など）はないが、受講者数の少ない科目に対する評価を解釈するには注意が必要であろう。

（文責 江草 浩幸）

授業評価アンケート結果の分析（音楽学部）

1. 評価の特徴

音楽学部には今年度より音楽マネジメント学科（音楽ビジネスコース、IT音楽産業コース）が加わり、音楽学科（演奏コース、音楽文化創造コース）との2学科体制となった。

全体の平均値は音楽学科が3.50で音楽マネジメント学科は3.21となった。音楽マネジメント学科は今回が初めてのアンケートであり、学生数も少ないので音楽学科との比較が正しい評価となるかはともかく、何らかの特徴が読み取れればと考えた。

まず学生自身の授業への心構えに関する質問と回答

問1《休まずに授業に出席している》	音楽 3.24	マネジメント 3.40
問2《授業に熱心に取り組んでいる》	音楽 3.43	マネジメント 3.26
問3《シラバスをきちんと読んだ》	音楽 2.87	マネジメント 2.30
問4《授業の目的を理解している》	音楽 3.51	マネジメント 3.24

他学部と同じく音楽学部においてもシラバスを読んでいない学生が少なからずいることがわかる。

音楽学科学生は《休まずに授業に出席している》はまずまずではあるものの《授業に熱心に取り組む》なおかつ《授業の目的を理解している》ようではある。この項目の音楽マネジメント学科学生の奮起を期待したい。

音楽学科学生は《シラバスをきちんと読んだ》が2.87であるにもかかわらず問10《授業はシラバスに基づいて実行されている》が3.51になるという不可解な数値になっている。シラバスを読んでいなければ、シラバス通りの授業かどうか評価できないはずである。その点音楽マネジメント学科の学生は《シラバスをきちんと読んだ》2.30で《授業はシラバスに基づいて実行されている》が2.93となり妥当な数値となっている。

教員は最初の授業でまずシラバスの説明を行い、授業の目的、到達度目標を述べるとともに、学生の積極的な授業参加を喚起することが重要かと思われる。

教員への評価に関する質問と回答

問5《教員は熱意を持って授業している》	音楽 3.81	マネジメント 3.42
問6《教員の話し方はわかりやすい》	音楽 3.57	マネジメント 3.26
問7《教員は授業時間を守っている》	音楽 3.79	マネジメント 3.37
問8《教員は学生主体の授業にしようとしている》	音楽 3.61	マネジメント 3.40
問9《板書、PP等が効果的に用いられている》	音楽 3.51	マネジメント 3.40
問10《シラバスに基づいて実行されている》	音楽 3.51	マネジメント 2.93
問11《授業の内容は興味深い》	音楽 3.58	マネジメント 3.30
問12《授業の内容は理解しやすい》	音楽 3.48	マネジメント 3.14
問13《成績の評価基準が明瞭に示されている》	音楽 3.48	マネジメント 3.27
問14《この授業に満足している》	音楽 3.55	マネジメント 3.28

概して音楽学科は問12(3.48)問13(3.48)を除いて3.5以上の高い数値である。マネジメント学科は《担当教員の話し方はわかりやすい》《授業の内容は興味深い》《授業の内容は理解しやすい》《この授業に満足している》の数値がやや低い。これは留意点としておきたい。ただこれらの項目は教員に対する評価ではあるものの、学生自身の理解力により数値が多少変化することがあると認識しておかなければならない。

以上の項目は教員の授業への熱意、態度であり私たち教員が常に心掛けなければならないものであるが、最も重要なのは、「学生が授業の内容を理解する」ことであり、「興味深く感じる」ことであり、「授業に満足する」ことであると思われる。これらの数値が高くなることを来年度の課題とすることも視野に入れ、教員は学生の理解力を把握し更なる創意工夫が必要かと思われる。

レッスンのアンケート結果は昨年とほとんど変わっていない。

問1《私は休まず授業に出席している》 昨年 3.35 今回 3.22

問2《私は遅刻せずに出席している》 昨年 3.66 今回 3.65

問3《私は熱心にレッスンに取り組んでいる》 昨年 3.56 今回 3.48

問4《私はレッスンの準備を十分にしている》 昨年 2.90 今回 2.98

出席率が多少落ちてはいるもののレッスンへの心構えが昨年と変わったというわけでもなく、今回も学生自身の譜読み等の予習・復習不足の認識があると思われる。

問5《レッスンの進行は技術や理解度に合わせて適切である》 昨年 3.76 今回 3.79

問6《このレッスンの教材は自分にとって適切である》 昨年 3.75 今回 3.79

問7《このレッスンで意欲が向上している》 昨年 3.69 今回 3.62

ほぼ変化なく、昨年と同じく教員の適切な指導が行われていると思われる。

問8《担当教員のあいだに信頼関係が出来ている》 昨年 3.68 今回 3.61

問9《担当教員の話し方や態度は適切である》 昨年 3.89 今回 3.84

問10《担当教員の熱意や真剣さが感じられる》 昨年 3.87 今回 3.87

問11《担当教員は授業回数や時間をきちんと守っている》 昨年 3.84 今回 3.88

問12《担当教員は休講に対する補講を適切に行っている》 昨年 3.78 今回 3.86

これらの項目も昨年と同じく数値は高く、教員が真摯にレッスンに取り組んでいることが高く評価されている。

昨年も述べたようにマンツーマンの形態をとる実技個人レッスンは、担当教員と学生との人間関係が評価に反映されることもあり、アンケート回収件数が極端に少ない場合、評価が平均化されず極端な数値結果となる可能性もある。その点は留意しておかなければならない。

2. 考察

質問の回答に『そう思う』が4.0で『ややそう思う』が3.0である。その数字の差をどう評価するか難しい。昨年もアンケートを分析する際、3.2と3.7の差をどう読むのか、また『ややそう思う』が3.0であり『ややそう思わない』が2.0であるならばその中間の2.5は平均と考えれば良いのか、そうであるなら平均以上の2.8ほどの程度の評価をすれば良いのか判断に苦慮した。

アンケートを正しく読み取り解釈する方法がないものだろうかと模索しつつ、結論として3.0であればまだまだ努力の余地があり、3.5以上は秀逸と考えた。これがはたして正しい評価なのか私には確信が持てないが、数値に意味づけをするならばそのように考えることとした。

数値の平均点だけを表すのではなく、質問に対して否定的な回答である『あまりそう思わない』『そう思う』の学生が何名いるかという点に焦点をあてると、もう少し特徴が見え

てくるかもしれない。肯定的回答『そう思う』『ややそう思う』グループと否定的回答『あまりそう思わない』『そう思わない』グループとの対比をして、それぞれが全体の何割を占めているかを表すのである。

アンケートの分析はきわめて難しい。学生の授業評価を最大限生かすためには彼らの意見が正確に反映されるよう、今後もアンケートの設問・回答の文言、分析等のより良い方法を検討しなければならない。

(文責 米田 哲二)

授業評価アンケート結果の分析（人文学部）

1. 評価の特徴

最初に、執筆者はこのような数値統計の分析について全くの素人であるので、数値の特徴的現象について指摘する程度の分析以上のものでないことをお断りしておく。

分析データの留意点

今年度は昨年度とグループ分けが変化した。昨年度は、日本文化・英米文化・人間心理・社会デザインの4学科のグループであったが、今年度はこれに仏教文化・文化交流2学科が加わった。仏教文化・文化交流は、今年度が設置初年度で、在籍学生が少なく、また提供科目も少ない。また、英米文化は今年度在籍学生が4回生のみである。

項目別では、昨年度と今年度で質問内容等が異なるものがある。質問1と質問8が、質問の狙いがほぼ同様であるが、質問文が異なり、昨年度の質問10に対応する今年度の質問9には、あらたに「パワーポイント」が加わった。

このような事情があり、単純に昨年度との数値比較をすることにややためらいを感じるところがないでもないが、無理のない範囲で、数値の特徴を指摘したい。

昨年度との比較

まず、全体の数値上の比較を試みる。旧4学科全体の平均値は、今年度がすべて上回っている（日本文化 3.47→3.53、英米文化 3.68→3.85、人間心理 3.25→3.42、社会デザイン 3.22→3.26）。

次に、学科・項目別にみても、おおむね大半の学科では各項目について、昨年度の数値を上回っている。なかでも質問4・5・6でかなり顕著な数値の上昇がいくつかの学科で見られる（4：英米文化・人間心理、5：人間心理・社会デザイン、6：人間心理・社会デザイン）。

逆に、すべての学科で、今年度が昨年度を下回った項目が質問1であるが、これについては、既述のように質問文の変更と無関係ではないと思われるので、慮外とする。

それ以外に、今年度が昨年度を下回った項目は、質問2、3、8、9、10であるが、それは一部学科にとどまる。

項目の中で、全体にとりわけ数値が悪いのは質問3である。これは例年の傾向であり、ほとんど改善されていないが、例外は英米文化であり、質問2とともに、数値が顕著に上昇している。

学科を平均値で比較すると、数値上の上下が存在するが、その数値の差については意味づけが難しいように思う。ただ、新設学科について、対照的な現象がみられる。文化交流学科は、最も平均値が高い英米文化について平均値が高いが、仏教文化は逆に最も低い平均値である。

各学科について項目別に言えば、英米文化が平均して高数値であるうえ、質問2・3に顕著な数値の上昇がみられ、また人間心理で7質問項目（4・5・6・10・11・12・14、特に6・14は顕著）に数値の上昇がある一方で、社会デザインに5質問項目（2・3・8・9・10）で数値の下落がみられる。

項目別比較

各学科の項目を数値の高い順に並べると、以下のようになる（[]内は、同数値）。

日本文化 7・5・6・14・10・8・[9・11]・12・13・4・2・3・1

仏教文化	5・7・1・13・2・6・14・10・4・[3・9・11・12]・8
文化交流	14・[6・7・9・11・12]・5・8・13・10・2・4・3・1
英米文化	[5・8]・[6・7]・[2・4・9・10・11・12・14]・13・3・1
人間心理	5・7・6・11・14・12・9・10・4・[8・13]・2・1・3
社会デザイン	5・7・6・11・9・10・14・13・8・12・4・1・2・3

各学科ともほとんど共通した傾向として、数値が高いのは、質問5・7、それに次ぐのは質問6であり、9、10、11、14なども、順位の前半にあることが多いようである。

逆に、数値の低いものは、1、2、3である。また概して4、8、12、13などが中間以下に位置する場合が少なくない。

2. 評価の傾向

以上の数値上の現象的な特徴の意味を簡単に評価してみたい。

まず、昨年度との比較については、単純化は慎むべきであろうが、全体的な数値の上昇は、教員・学生双方で、それぞれ授業に対する取り組みの在り方が改善傾向にあることを示すと理解してよいであろう。

次に質問項目による数値の在り方に関しては、これを質問項目に置き換えてみると、教員の熱意（質問5）・話し方（質問6）・授業時間遵守（質問7）という、教員の授業態度に関するものの評価数値が高い。さらに視聴覚教材の効果的利用（質問9）・シラバスに沿った授業（質問10）・授業内容の興味深さ（質問11）・授業に満足（質問14）なども平均して評価数値が上位にある。

昨年度との比較で言えば、顕著な数値の上昇がみられる質問4（授業目的の理解度）・5（教員の熱意）・6（話し方のわかりやすさ）でかなり改善がなされていると評価できるかもしれない。

逆に、出席（質問1）・授業への取り組みの熱意（質問2）・シラバスを読むか否か（質問3）という学生自身の授業への対処の仕方について評価数値が低い。

さらに、授業目的の理解（質問4）・学生主体の授業（質問8）・内容理解度（質問12）なども評価数値の順位が低めと言える。

もちろん学科によってそれぞれ順位が異なり、例外的順位も少なくないので、一般化できるわけではないが、概して言えば、教員の授業に対する取り組み姿勢、授業内容の興味深さ、満足度について好意的である一方、学生自身自己の授業への取り組み方について控えめ、遠慮がちな自己評価であるのは、人文学部学生の性向に関わるものであるととりあえずは理解しておきたい。

しかしながら、この数値が客観的状況を直接に反映したものであるとすると、教員の熱意や創意工夫にも関わらず、学生は授業目的をあまり理解できず、主体的に取り組める授業にはなっていないし、内容も十分には理解できていない、というような状況を読み取らざると得なくなる。それは教員の熱意・努力と学生の学習態度や学生が得るはずの教育成果の間に、ある種の断絶が存在することを示すであろう。このようなことを以上のような初歩的な数値の分析から導き出すのは、やや早計かもしれないが、あえて付記することにしたい。

（文責：中村 圭爾）

授業評価アンケート結果の分析（人間発達学部）

1. 評価の特徴

今年度、発達栄養学科では学部専門基礎（子ども／栄養）2科目、子ども発達学科22科目（平均回答数34件）、発達栄養学科33科目（平均回答数22件）の計57科目で授業評価アンケートが実施された。昨年度は前期授業、今年度は後期授業で実施している。昨年度と質問内容等が異なるものは、対応する質問項目で評価した。また、学部専門基礎は、2名のみ結果を含む2科目のみで実施されており、評価が難しいので除外した。

1) 多部門との比較

授業評価アンケート調査結果のグループ平均一覧の中で、子ども発達学科は6項目、発達栄養学科では、3項目が最下位という結果であった。子ども発達学科の間3（私はこの講義要項（シラバス）をきちんと読んだ）は、グループ平均得点の中で最も低い2.33、発達栄養学科では、総合評価である間14（この授業に満足している）が最も低い3.17であった。

このように授業評価アンケートが他部門と比べて低い大きな理由としては2つ考えられる。1つは、受講人数が、他部門に比べて多いことである。受講人数と質問項目の間には、発達栄養学科の間1以外有意な関連はなく、有意ではないが負の関連が多く項目で見られた。子ども発達学科では、受講者が70名以上の授業が、他部門に比べて多い。授業内容によっては、受講者数を検討する必要があると考える。

もう1つ評価が低い理由は、人間発達学部の特徴として、資格取得の科目が大半を占め、学生が選択できる科目が他学部と比べて非常に少ないことである。講義要項を読んで授業を選択することが少ないため間3、それに関連する間10、13が低くなりやすいといえる。

学生が講義要綱を読むのは主に履修登録時である。数か月前に読んだかどうかは覚えていないのではないだろうか。この項目をクラス別にみると回答4.（そう思う）は同じ人数のことが多い。これらの学生はすべての講義要綱を読んでいるために、どの教科でも回答4を選んでいると考えられる。間3に関しては、講義要綱について再認識させてからアンケートを行うか、アンケート項目から除外し、最初の授業時に講義要綱の説明を全教員が行うなど、今後、対策を考える必要がある。

2) 前年度との比較

昨年度と今年度を比較すると、子ども発達学科で評価が上がった項目は間4.6.7.9.11.12.13.14の8項目で、（担当教員の話し方はわかりやすい）など教員サイドの授業の取り組み評価であった。逆に下がった項目は間1.2.3.5.8.10の6項目で、（私は休まず授業に出席している）などの学生サイドの授業への取り組み評価であった。このことより、昨年度に比べて教員の授業の取り組み姿勢が学生により評価されているといえる。

今年度アンケートを実施した科目は、実習前の指導科目や、国語、体育等の小学校教諭の教職に関する科目等、目的がはっきりしているものが多かった。これらの科目に関しては間11（授業の内容が興味深い）間12（授業の内容が理解しやすい）も評価が高かったのも、教員やFD活動の取り組みの結果というより、科目による影響が大きいと考えられた。

発達栄養学科では、すべての項目で評価が下がった。昨年度アンケートを実施した前期科目には「調理実習」等の調理系の実習が多かったが、今年度実施した後期科目は、学生が苦手とする化学系の科目や実験、情報処理系の科目が多かった。発達栄養学科は、前期と後期で授業

科目がまったく違うので、経年変化というよりは、科目に左右された結果と考えられた。しかし、同じ化学系や情報処理系の科目であっても、評価の高い教員がいる。工夫しだいで、学生の苦手意識をなくし、興味をもてるような授業展開ができるといえる。

2. 受講者数と質問項目との関連

授業のどの点を改善すればよいかを検討するために、学科別に受講者数と質問項目との相関係数（表1）を求めた（スピアマンの順位相関係数）。

子ども発達学科（表1：右上）では、総合評価といえる問14（この授業に満足している）と最も強い相関があったのは問11（授業の内容は興味深い）と問12（授業の内容は理解しやすい）であった。この問11、12と最も強い相関があったのは、問6（担当教員の話し方はわかりやすい）、次が問5（担当教員は熱意をもって授業をしている）であった。

発達栄養学科（表1：左下）でも、子ども発達学科と同様に、問14と強い相関があったのは問12で、次に強い相関があったのは問5であった。問12と最も強い相関があったのは問11、次に問5、6であった。

以上のことより、授業の満足度は理解しやすいかで左右され、理解しやすいかどうかは、担当教員の話し方や熱意、授業内容の興味深さによるところが大きいと考えられた。また、発達栄養学科では、問4（授業の目的を理解している）と問11の間にも強い相関があった。授業の目的を理解させることも、授業に興味をもたすのに重要といえる。

問6の得点が低い科目を個別にみると、回答4（そう思う）もある程度とれている科目と、回答4がほとんどなく回答3、2、1にばらついている科目があった。回答4がある程度とれている科目は、レベルにあっていない学生は評価するが、そうでない場合わかりにくいと考えられる。この解決策としては、もう少しわかりやすい説明を補足するということが求められる。一方、回答4がほとんどない科目は、話し方自体に問題があると考えられ、話し方を改善、工夫することが求められる。2学科ともに、問5と問6には強い相関があった。学生に理解してもらおうと、学生の視点に立って話し方を工夫する熱意は、必ず学生に伝わると考える。

表1. 学科別 受講者数と質問項目との相関係数

人数	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	
1	0.34 *	0.29	-0.23	-0.40	-0.07	-0.18	-0.18	-0.15	-0.41	0.05	-0.36	-0.25	-0.17	-0.33	-0.21
2	0.04	0.20	0.29	0.20	0.11	0.14	0.04	-0.06	0.06	0.23	-0.04	0.15	0.03	-0.13	0.11
3	0.3	0.43 *	0.40 *	0.52 *	0.86 **	0.80 **	0.81 **	0.59 *	0.65 **	0.57 **	0.56 **	0.87 **	0.82 **	0.80 **	0.87 **
4	-0.05	0.15	0.79 **	0.37 *	0.53 *	0.17	0.27	0.18	0.50 *	0.05	0.65 **	0.46	0.39	0.56 *	0.52
5	-0.15	-0.12	0.45 *	0.12	0.69 **	0.66 **	0.67 **	0.52 **	0.51 **	0.35	0.51 *	0.69 **	0.77 **	0.71 **	0.74 **
6	-0.03	-0.05	0.36 *	0.21	0.59 **	0.91 **	0.94 **	0.84 **	0.59 **	0.66 **	0.38	0.89 **	0.86 **	0.62 **	0.83 **
7	0.03	0.03	0.28	0.05	0.47 **	0.75 **	0.65 **	0.84 **	0.62 **	0.69 **	0.45 **	0.91 **	0.94 **	0.78 **	0.91 **
8	-0.17	0.07	0.54 **	0.07	0.59 **	0.67 **	0.61 **	0.55 **	0.41	0.64 **	0.39 **	0.72 **	0.82 **	0.54 **	0.75 **
9	-0.14	0.01	0.10	0.14	0.47 **	0.69 **	0.72 **	0.46 **	0.49 **	0.20	0.46 **	0.56 **	0.53 **	0.54 **	0.75 **
10	-0.08	-0.04	0.37 *	0.31	0.69 **	0.55 **	0.51 **	0.37 *	0.42 *	0.61 **	0.36	0.62 **	0.57 **	0.48 *	0.58 **
11	0.01	0.15	0.68 **	0.41 *	0.69 **	0.55 **	0.51 **	0.37 *	0.42 *	0.61 **	0.56 **	0.57 **	0.76 **	0.66 **	0.66 **
12	-0.04	-0.06	0.47 *	0.22	0.89 **	0.74 **	0.73 **	0.45 **	0.60 **	0.53 **	0.60 **	0.88 **	0.76 **	0.95 **	0.95 **
13	-0.15	-0.15	0.46 **	0.28	0.75 **	0.88 **	0.86 **	0.63 **	0.62 **	0.69 **	0.57 **	0.89 **	0.82 **	0.94 **	0.94 **
14	-0.16	0.02	0.48 *	0.21	0.63 **	0.80 **	0.80 **	0.49 **	0.61 **	0.61 **	0.55 **	0.62 **	0.73 **	0.86 **	0.86 **
					0.75 **	0.87 **	0.85 **	0.58 **	0.63 **	0.75 **	0.58 **	0.84 **	0.89 **	0.82 **	0.82 **

* $p < 0.05$, ** $p < 0.01$

右上: 子ども発達学科, 左下: 発達栄養学科

(文責 中村 富予)